

資料

神戸市立中央図書館所蔵

神戸駐在英国領事館の裁判記録邦訳 (五)

——一八七一年九月より一八七二年一月までの記録——

岩村等

凡例

資料 (1)~(10) (以上第一五号)

(11)~(24) (以上第一六号)

(25)~(42) (以上第一九号)

(43)~(57) (以上第二〇号)

(58)~(68) (以上本号)

(58) ロバート・ウィンストン対 S・I・ピンクレット

刑事

(187)

女王陛下の地方裁判所

兵庫 一八七二年五月八日

判事兼領事、A・J・C・ガワ―様の前で

ロバート・ウィンストン (Robert Winstone)

対

S・I・ピンクレット (Pinclert)

暴行殴打

被告。私は、原告の宣誓証言において陳述されているすべてについて、有罪であるとは考えない。土曜日の夕方、私は上陸し、朝明かりを消した一一時頃、ノーチラス通から帰ってきた。その時、一等航海士が船尾桟甲板にいたが、彼は、彼とコ

ックとに対して使用された侮辱的な言葉について、原告に文句を言いはじめた。私は、最も若い見習とアーサー・スキナー (Arthur Skinner) とを呼んで、彼とウィンストンとで、何を言っていたのかと聞いた。彼は、一等航海士が私に言ったことは正しいと言った。そこで、私は、舵輪からウィンストンを呼ぶと、彼は、私を中傷することを言っていたことについての私の質問に答えて現われた。その時、私は、彼の耳を針金でしぼり、午後、彼は出ていった。それから、私は主甲板に降りていき、彼はあとにつづいた。そして、船長がおきているかどうかを見るために船室をのぞいたが、彼はいなかった。しかし、約半時間後に、私は、船尾桜甲板で彼が船長に話しかけるのを見た。私は、彼に、何を船長に話していたのかと尋ねた。ずっと遠かったので、私は、彼の返答を聞けなかった。すぐあとで、私は、彼の肩をつかんで、バイルギイ (Bailegy) に話しかけていた船長の前へ連れていった。ウィンストンが何を話していたかという私の質問に対して、船長は、彼が私についての不満を言って、領事に会いたいと願っていると、私に言った。そこで、私は、船長に、ウィンストンがその件について言ってきたことを伝えた。船長は、私に答えないで、ウィンストンは、彼が望むならば月曜日に領事に会うことができると言った(これは

は日曜日のことである)。常に、私は、ウィンストンを特によくしてやっていたが、この場合にだけ、彼が、この法廷においては言いたくないやり方で一等航海士について話していたから、彼の耳をひっぱり、平手でぶったのである。原告は、私について、悪い言葉を言ったことは決してない。

事実認定

被告自身の陳述により、彼が暴力を行使し、原告を虐待したことは明白である。

判決

当法廷は、被告が、五ドルの罰金と一ドルの訴訟費用との合計六ドルを支払うべしと判決する。

署名 エイブル・J・C・ガワー

判事

兵庫大阪英国領事館の印

〔訳注 原文一八九頁より一九五頁までは白紙である。〕

(59) チャールズ・ジョージ・ヘンダーソン対アルフレッド・ミリッジ

No 35

女王陛下の地方裁判所

兵庫 一八七二年五月二十九日

副領事にして領事代理兼判事 H・S・ウィルキンソンの前で

C・G・ヘンダーソン

対

アルフレッド・ミリッジ

(Milledge)

契約の不履行と、英国船ヌールマハ
ル号の荷降ろしについて定められた
金額の残高としての二〇〇ドルの回
復請求

両当事者は、直接出廷した。

チャールズ・ジョージ・ヘンダーソンは、宣誓して証言した。この前の三月の初め頃に、被告は、被告の船ヌールマハル号の積荷降ろしについて三〇〇ドルを私に与えるということ、と、私と口頭で合意した。この合意を遂行するために、私は、三月一日にこの作業を開始し、四月六日まで船の荷降ろしを続けた。四月六日に、私は、被告から、荷降ろし作業の不履行の結果、もはや被告が原告の作業を必要としなくなったと述べ、手紙を受け取った。(提出された手紙は、被告によってそれが彼の手紙であると認められたことを示している)。その日以前に、私は、被告から一〇〇ドルを受け取っていた。次の月曜日に、私は、被告のところへ行って、このような手紙を受け取った驚きを表明した。被告は、それが彼のやったことではなく、代理人が、私が適切にその仕事を遂行していないと考え

て、その結果、彼(被告)に私に手紙を送るように指示したと言った。私は、彼に、勘定を支払うように依頼した。彼は、彼がそれを支払うことはできない。代理人が彼らの固有の責任で私の作業を中止した、私が彼らのところへ会いに行ったほうがいい、もし彼がその金を支払っても、あとで彼らは彼にそれを支払わせると言った。その船の代理人はフィッシャー商会である。私はフィッシャー氏のところへ行った。彼は、私とは何らの合意もしていない、私が船長と会わねばならず、船長が命令したら、彼がそれを払うと、言った。私は、船長のところへ戻って、彼に言った。彼は、その方法には常にやっかいなことがあると言ったが、私には、一銭も渡さなかった。四月二六日頃、私は、再度彼のところへ行って、金の支払いを頼んだ。私は、法廷外で問題の解決をはかりたいと言った。彼は、私に一銭も払わないと言った。彼は、むしろそれを法廷に出すつもりであったので、彼の代理人は、彼に何も言うことはできなかった。その時よりも前に、ある夜、被告は、私の家に居て、次のように言った。「ヘンダーソン氏よ、私は、あなたが大変好きです。あなたは、あなたの仕事を非常によくやった。しかし、あなたが私の事業主から代理人に來た手紙を見るならば、あなたは驚くだろう。私は、船上で、彼ら、奉公人の一人

に、言うべきことはそれ以上にもない」。四月六日以前に、被告は、私の側の怠慢について不満を言ったことはない。彼は、「できるだけ早く我々の荷物を降ろせ。私は、それが種々の荷物であることを知っているが、最善を尽してくれるならば、五〇ドルか一〇〇ドル以上を支払う。あなたが早くやってくれるなら、どれからということについては気にしない」と、言った。

被告の反対尋問に対して。その口頭の合意がなされたときに、私は、それを書面に変えるようにあなたに希望したではないか。あなたは、書面について何も言わなかった。七時一五分前頃か、手配がすみ次第、私の沖仲士は、船上にいた。沖仲士を神戸で手配することは難しいのである。私が荷を降ろすことができるよりも前に、どのようにしてロタール号は、二、三艘のはしけの積荷を降ろすことができたのか。答。はしけについて言うことは何もない。ブラウン商会ははしけの代わりを持っていなかった。エイメント号の船長は、何を理由としてあなたを解雇したのか。一日間、私は上陸していたが、船長は大阪へ行こうとしてトムソンを連れていった。私はトン当りで支払いをうけており、降ろした荷についての金の支払いをうけた。ロタール号の船長はあなたを解雇したか。いいえ。バルマ号の船

長はあなたを解雇したか。はい。しかし、彼は私のところへ戻ってきて、私が彼の船に米を積むことを望んだ。私が高過ぎる値段を指定したので、彼は認めようとはしなかった。

署名 C・G・ヘンダーソン

マイケル・プロデリック——製帆業者、兵庫三六番、アメリカ市民——は、正式に宣誓してのべた。五月一日から一七日まで、私は、ヌールマル号の船上でヘンダーソン氏のために職長をしていた。一七日に、私は、そこに落ちていた箱に足をぶつけて作業を中断した。二〇日に、私は、再び仕事を始め、一等航海士、キャロラン (Carolan) 氏が私の入夫の作業を停止させたので作業をやめた五月二三日か二四日まで続けた。私は、入夫を遊ばせておいても何にもならないと言った。彼は、気に入らなければ、私は陸に行っても構わないと言ったのである。私は、行こうと言った。私は、二度と船には行かなかった。船上に私がいた間、積荷降ろしにおいて、私あるいはヘンダーソン氏の分担については全く遅れがなかった。我々は、毎日、三五人から四〇人の、多数の入夫を船上で使っていた。しばしば、私は、荷物を主昇降口に運んだが、一等航海士と、そこで荷物を受け取っていた男とは、それを持つことができない、舷側のはしけにあわせるために、私が何か他のものを持つ

てこなければならないと言ったのである。ボートのいくつかは神戸に、いくつかは大阪に属していた。荷物を受け取っていた人は、ウォーバートン (Warburton) 氏であった。積荷が手の届く範囲にくるように運ぶことができなかったから、度々、私は、船のある所から別の場所へ積荷を動かさねばならなかった。手の届く範囲で動いたならば、積荷は、もっと早く運び出せたであろう。ジブ・クレーンの鉄柱が二つ、一つは甲板に、一つは中甲板にあった。数回、原告は、それらを動かそうとした。中甲板のひとつは、とくに私の邪魔になっていた。何回も、それを動かさねばならなかった。ウォーバートン氏は、それらが壊れていると言っていたので、そのジブ・クレーンを動かそうとはしなかった。私は、彼に、それは私に全く関係のないことだと言った。私は、人足のように、邪魔になっているそれらも取りのけねばならなかった。私は、ミリッジ船長が晩原告の家に居たことを覚えていた。彼は、できるかぎり早く船を出せるならば、三〇〇ドルのほかに五〇ドルか一〇〇ドルを出そうと言った。彼は、好意的に話しかけていた。私のいるところで、ミリッジ氏が原告に不満を言っていることを聞いたことは全くない。

原告による反対尋問。船上で、私がはしけを待たねばならな

いということは全くなかった。沖仲士たちは、彼らを監督するヨーロッパ人ぬきで船にやってきたのか。私は、覚えていない。沖仲士が岸から離れ次第、私は、三〇人から四〇人の沖仲士と一緒に、毎日、七時頃、船に上がった。二等航海士と船員が私を助けた。誰が甲板にいたか覚えがない。私はずっと下のほうにいた。原告の契約の継続中、沖仲士を監督するヨーロッパ人は船上に一日中いなかったのか。上述の時間内に、私自身が船上にいた時に、彼らが監督のヨーロッパ人なしでいなかったと言うことはできない。それは、三月一日から一七日までと、二〇日から二三日か二四日までのことである。

署名 M・ブデリック

原告は、五月七日に、アメリカ合衆国副領事の前で、ウィリアム・ヘンリー・ライト (William Henry Wright) によって作成された宣誓供述書を提出し、証拠として朗読されるように希望した。原告は、ウィリアム・ヘンリー・ライトが兵庫にいないことと、彼が上海へ行くために兵庫を去ったことを宣誓証言している。

被告は、この宣誓供述書を証拠として認めることに異議を唱えている。

宣誓供述書は承認されず、被告は反対尋問の機会を持たなか

料
つた。

これで、原告の陳述を終了する。

アルフレッド・ミリッジ、英国船ヌールマハル号の船長、被告は、正式に宣誓して証言した。私は、ヌールマハル号の積荷降ろしのために、三〇〇ドルを原告に与えるという口頭による合意を彼と締結したことを承認する。

原告による反対尋問。私は、渡した、すなわち、彼が望むならばフィシャー氏が支払ったであろう一〇〇ドル以上の金を与えようとは言わなかった。あなたは、フィシャー氏が自らの責任で、私（原告）を解雇し、私が十分に早く積荷を降ろさなかつたと言ったか。私は、そうしたとは言えない。私が乗組員を使って手伝わせることができる、あなたは言わなかったか。いいえ。あなたが望むならば、一等航海士が一人か二人を手伝いにいかせられると言ったかもしれない。船体の保護のため、荷降ろしを監督するために二等航海士が船倉に残っているのが通例であるのか。それは一般的なきまりではない。二等航海士がそうすることは極めてまれである。

法廷に対して、四月六日以前に、私は、原告に対して、十分に早く積荷降ろしをしていないと、何回となく不満を言った。私は、原告が監督者なしで沖仲士を派遣しており、そうすべき

ではないと、彼に伝えた。日付は忘れたが、そうしたことが何日かあった。

署名 アルフレッド・ミリッジ

ジョン・キャロラン、英国船ヌールマハル号の一等航海士、は正式に宣誓して証言した。荷役請負人が一人、三月二〇日の月曜日に、積荷を降ろすために船にやってきた。一〇艘のはしけ分の積荷がその日降ろされた。その荷役請負人は、ヘンダーソンすなわち原告であった。原告は、船倉ではずっと二等航海士に、舷門でも一人に、補佐されていた。彼は、船倉では、時に応じて乗組員の幾人かに助けられていた。最初の五日間程は、原告は、一日につき二ないし三時間休んでいた。最初の五日間以後約八日間、彼は、各々の日について一〇分以上船にいることはなかった。尋問されたプロデリックと呼ばれていた男は、事故で足を負傷するまで、監督として行動し、一日中甲板の上にいた。彼がいけない間の一日中、甲板にはヨーロッパ人が全くいなかった。その間、原告は、通例、朝八時頃やってきて、夜五時か六時までいた。沖仲士たちが八時前にやってくることはめったになかった。七時半から八時が、通常の彼らの時間である。私は、彼らが八時半にもなってやってきたことを覚えていいる。九時前の一五分間にできることは非常に少ない。と

いうのは、舷門の男——乗組員の一人——が八時に朝食をとらねばならないからであつた。事故のあとプロデリックが再び加わったときには、三、四日船に滞在した。それから、彼は上陸して、再び作業に戻ることはなかつた。私は、彼の沖仲仕を認めはしなかつた。彼は、私の沖仲仕をとめたことについては私に抗議しなかつた。プロデリックが二度目に去ったときには、一日か二日も船に來た職長はいない。それで、船にやつてきた新しい職長の名前を私は覚えていない。彼は、一日につきはしけ二艘分の積荷を降ろしたが、四艘分やつたことはめつたにない。積荷を受け取るために舷側にはしけは待つていたが、荷物を受け取ることができなかつた。はしけは、よく六時頃にやつてきた。七時を過ぎるときはほとんどなかつた。この職長は出て行つたが、別の職長が来るまで、二、三日経過して、その間職長不在ということになった。彼は、前任者と同じ量のはしけ数だけ積荷を降ろした。すなわち、二艘から四艘分である。

原告の作業が省かれたときに、我々は、沖仲仕の助けをかりて、海岸からはしけを降ろした。私は、舷門からの積荷降ろしを監督した。二等航海士が、管理していた。若干の乗組員が手伝ってくれた。通常、二人の航海士と四人の乗組員がいた。我々は、一日にはしけ六から七艘分の積荷を降ろした。我々は、

一両の重量が二トン半の鉄道客車七両、給炭車一両、および他の設備を、七ないし八時間のうちに降ろした。我々は、積荷が届いたとおりに降ろしはしなかつた。積荷が届いたとおりに、鉄道関係者は、荷物を受け取ることができなかった。積荷の仕分は三つあつた。私が言いたいことは、一方の仕分の部分がはしけに積み込まれ、同一の仕分が全くなつたときに、手元にある仕分の一つを取り除くためにはしけが運ばれたというものである。原告によって粉々に壊された柱が一本あつた。

原告の雇人によって巻き揚げ機が作動させられ、それで中甲板にある柱に二トンの重量がかかり、柱をこわしたのである。積荷の内容は以下のとおりである。一台の機関車、二両の給炭車、九両の客車であつて、それらは二四フィートの箱に入れられていた。さらに、同じものための九つの車両わく、約一〇〇トンのマンチェスター商品、数捆の木綿、鉄道設備約一〇〇九点、三三箱の亜鉛メッキ製品、これらは各々九ハンドレッドウェイトの重さであつた。これはすべて兵庫で荷降ろしされた。船底の船倉には大阪宛の二五トンの銑鉄があつた。私は、積荷の約三分の一を降ろしたと信じている。彼はもっとやったかも知れない。原告が船に乗る前に、我々は、二日間、積荷降ろしをつづけていた。三月七日と九日に、我々は、私の監督で

料 積荷を降ろした。この二日間、我々は、鉄道設備をはしけ二一

資 艘分を荷降ろした。ヘッドレストの包みは、三〇ハンドレッドウェイトの重さであろう。そのうちのいくつかは、二ないし三ハンドレッドウェイトぐらいの軽さである。

署名 J・キャロラン

翌日、一八七二年五月三〇日まで休廷となった。

一八七二年五月三〇日、当事者双方が出廷した。

ジョン・キャロランの審問が続いた。我々が毎日いかに忙しかったかを示す航海日誌と、毎日引き渡された鉄道資材の量を示す帳簿とを私は提出する。

ヘンダーソン氏が作業を始める以前のこの二日間に、我々は一七九の包みを荷降ろした。

ヘンダーソン氏は、作業をしている間に、一一六九の包みを荷降ろした。

そして、ヘンダーソン氏が仕事をやめたあとで、我々は、七四六の包みを荷降ろした。船上には五つの商品があったが、どのようにして荷降ろしされたか、私は記録していない。鉄道資材に加えて、

酒、二二八箱

ビール、一二五箱

銃鉄、七〇〇個、重量二五トン
耐火レンガ、七〇〇〇個

があった。ヘンダーソンは積荷の三分の一かそれ以上を荷降ろしたと言わねばならない。彼は、中甲板のほとんどの荷物を降ろしたが、うまく海岸に運べないものが残った。彼は、最下船倉の積荷の幾分をも荷降ろした。

原告による反対尋問。ときどき数取り人がいた。しばしばそれは私自身であった。常に数取り人がいた。男たちは、いつも八時に朝食に行った。数取り人は、そのように八時に食事に行った中の一人である。銅が積み込まれていた。銅を積み込む時に、障害はほとんどなかったようである。原告の使用人の何人かが、銅の積み込みのために雇われていた。

法廷に対して。ヘンダーソンが作業に従事していた時に、沖仲仕が不足していたかどうかについては、私は思い出せない。

署名 J・キャロラン

サミュエル・ジョン・フィンチェット (Samuel John Finchet)、イギリス船ヌールマハエ号の二等航海士。ヘンダーソン氏が積荷降ろしの作業を行っていた間、私は、ずっと船倉にいた。その間、朝と午後の両方にわたって沖仲仕が不足するこ

とがあつた。このことを私はヘンダーソンに言つたが、午後には彼は彼らを他へ移した。しばしばしたわけではない。彼が積荷降ろしをやつてゐた時間の後の方では、沢山の沖仲士がいた。私は、ヘンダーソン氏が約三分の一の積荷を降ろしたと信じる。横浜で荷降ろししたマンチェスター商品二〇〇梱余り、鉄少々、約一二ハンドレッドウェイトの五五箱余りの大量の亜鉛メッキ鉄を除き、彼が中甲板の積荷も降ろしたのである。ヘンダーソン氏は、最下船倉の積荷も約三分の一を降ろした。ヘンダーソン氏は、中甲板のいくつかの箱を残した。ヘンダーソン氏が仕事を始める前の土曜の夜、一、〇〇〇トン、あるいはそれよりもっと多くの積荷があつた。ヘンダーソン氏が積荷の三分の一を降ろしたと私が言う時には、船全体の三分の一を意味しているのである。彼が仕事を始めたときには、船には三分の一以上の量の積荷があつた。どれぐらい多いかは言えなかつた。

原告による反対尋問。私は帆を固定するために上に行ったが、しばらくの間にすぎない。私は、ずっと船倉にいた。プロデリックが九日間足を負傷したために陸にいたと言いたい。プロデリックが足を負傷した時に、原告が甲板にいたかどうか、話すことができない。原告は、我々の乗組員を助けた、はしけ

二、三艘分の砲金と、たばこ約二五梱とを含めていた。

署名 S・J・フィンチェット

チャールズ・ジョージ・ヘンダーソン、原告は再審問された。私の信ずる限りでは、私は、積荷の三分の一を荷降ろした。私は、最下船倉の三分の一以上を荷降ろした。私は、最下船倉のほぼ半分に近いものと言いたい。

原告に対して。私は、何トンかとはいえない。船上に行った時に船を見て、船から離れた時には、積荷の約三分の二を荷降ろしたと言いたい。

署名 C・G・ヘンダーソン

本訴訟において、チャールズ・ジョージ・ヘンダーソン、港湾労働者は、イギリス船ヌールマハル号の船長、アルフレッド・ミリッジを相手取つて、船の積荷を降ろしたならば被告が原告に三〇〇ドルを支払い、そのうち一〇〇ドルだけが支払われた契約の不履行に対して二〇〇ドルの支払いを請求している。被告は、契約を作成したことについては争わない。原告が三月一日から仕事をはじめ、契約の無視により、被告の側では、原告の労役を以後は必要としないという手紙を被告が出した四月六日まで原告の使用人が働いていたことも、認められる。手紙が書かれて、原告が重過失を犯していると主張して、

被告がもっと原告に支払うことを後に拒否して、原告の労役については十分に償っていると正当化した時以前に、原告が一〇〇ドルを受け取ったことも認められている。

原告は過失を否定した。私の意見は、原告が重過失については無罪であり、契約上、なされた労役を償わせる権利を有しているということである。原告が受け取るべき金額については、彼は、積荷の三分の二を降ろしたと言っている。一等航海士は、三分の一かそれ以上と言っている。二等航海士は、原告が荷降ろしを始めた時に船にあったものの三分の一以上である、船全体の約三分の一と陳述する。一等航海士によって提示された積荷の不完全な一覧表と、中甲板と最下船倉とから、原告によって荷降ろしされた積荷の割合についての証言とによれば、私の意見は、現在原告が荷降ろししたと確認されうるのは、彼が契約をなした時に船にあった積荷のほぼ半分であるということであって、原告はその割合に対して、合意された金額の半分を受け取る権利があり、それは三〇〇ドルの半分、あるいは一五〇ドルであると私は考える。すでに彼は一〇〇ドルを受け取った。

判 決

それゆえ、被告は、原告に、五〇ドルの金額を、訴訟費用五

ドル五五セントとあわせて、総計五五ドル五五セントを支払うべしと私は判決するものである。

署名 H・S・ウィルキンソン

領事代理にして副領事兼判事

兵庫大阪英国領事館の印

(60) フィリップ・フランシスコ対ジョン・ヘンリー・

ウィグナル

Na
40

女王陛下の地方裁判所 兵庫

一八七二年六月一日

フィリップ・フランシスコ

(Philip Francisco)

対

ジョン・ヘンリー・ウィグナル

原告は、見張り人としての給料一二ドル五〇セントを請求する

フィリップ・フランシスコ——原告——は宣誓して供述す

る。被告は、月二五ドルで、彼の作業場の見張り人として、私を雇用した。昨年の七月一五日から、私は見張りをはじめ、一月一五日までの四カ月分として、被告の事務員から一〇〇ド

ルを支払われた。日本人が原告からその場所を借りたので、一月二五日頃に、私は原告に対して、「今や、日本人がこの場所を持っているので、あなたはもはや私を必要としない」と言った。原告は、彼の品物がその場所にあるかぎり私は留まらねばならないと言った。二月一〇日に、原告の兄弟が、見張り人としてはもう必要ないと私に言って、原告のところへ賃金の支払いをうけに行くようにと指示した。

被告による反対尋問。私は見張り人の家に留まりたいとあなたに頼んだ。それは、一〇月のことであつた。私は一日中、監視のためにそこにいなければならないし、一二時には料理のために外に行けないのでそこで料理をしたいから、その家にいるのが私にとって都合がよいと言つたのである。

署名 フィリップ・フランシスコ

X 彼のX印

これで原告の陳述を終了する。

ジョン・ヘンリー・ウィグナル——被告——は宣誓して陳述した。彼が、その家に留まらしてほしいと頼んだのは一月の支払いをうけてからあとのことであつた。彼は、我々がその場所を去る日までの支払いをうけた。しかし、彼の行き場所がないので、我々の機械が建物内にあるかぎり、そこに居ても構わ

ないと私は言つた。彼は、四ヵ月分の賃金である一〇〇ドルの残金である六九ドルを、一月一六日に受け取つた。法廷に対して。原告がその家に留まることを許されたことについての会話を誰かが聞いたかどうか私は言えない。

判決

私は、被告が原告に、一二ドル五〇セントと訴訟費用三ドル、合計一五ドル五〇セントを支払うべしと判決する。

署名 H・S・ウィルキンソン

副領事にして領事代理兼判事

兵庫大阪英國領事館の印

(61) G・ドモニィ商会のもとで商売に従事するG・

ドモニィとアルフレッド・プラマ対ジェームズ・

ハーディ (-)

No 41

女王陛下の地方裁判所 兵庫

一八七二年六月三日

G・ドモニィ商会のもとで商売に従事する原告は、被告の要請によりA・ワイル (Wile) に

G・ドモニィとアルフレッド・プラマ (Alfred Plummer)

資 料

対

ジェームズ・ハーディ

って購入された商品の代金六六ドルの支払いを請求する。

被告は、私はすでにその金員を支払ったと陳述している。

原告側は、彼らの代理人クラッチレイが出廷し、被告は本人が出廷して、上記の問題となっている請求の決定をジョン・カーリー・ホール (John Carey Hall) の仲裁に委ねることに相互に同意した。ジョン・カーリー・ホールの裁定は拘束力を持ち、裁判所の命令とされる。

署名 H・S・ウィルキンソン

副領事にして領事代理兼判事

兵庫大阪英国領事館の印

(62)

スム・フン・ファン対ジョセフ・ヘンリー・ウィグナル

No 42

女王陛下の地方裁判所 兵庫

一八七二年六月四日 火曜日

スム・フン・ファン (Sun Hong Fun)

対

ジョセフ・ヘンリー・ウィグナル

原告は、ガンボートスナップ号のかまその他の取り替え作業賃として、三二二ドル一〇セントを請求する。

グナル

被告は、契約によれば作業が完成されていないと主張した。

被告は、調査を行うように要請した。

法廷は、本件調査を行うために領事によって任命されたウィリアム・ハイゼ (William Heise) の出席を求めて、一八七二年六月五日水曜日の朝一〇時まで延期された。

一八七二年六月五日水曜日

当事者双方が出廷した。

ジョセフ・ヘンリー・ウィグナル、被告は、契約を認め、作業が手ぎわよくなされなかったと主張して、陳述を開始した。

正式に宣誓させられてから、被告は以下のように陳述した。私はくり返しボイラーを調べたし、作業の進行中、作業が厳格になされていないと原告に苦情をいった。リベットの穴が板のへりにあまりにも近すぎて、板が十分に重なりあわないというやり方について、私は苦情を言ったのである。原告が作業を終えたときに、私は、ボイラーを調べてみると、板の継ぎ目のところ

ろでボイラーが漏れているのを発見した。

法廷に対して。原告によって提出された契約は、それによって作業が行われた契約である。原告が領事に訴えた時に、私は、調査官が任命されるように要請した。後に、法廷の領事は、調査のためにハイゼ氏を任命したと私に教えた。私は同意を表明して、「結構です。適切な調査が行われるならば、それで十分です」と言った。そこで我々全員、ハイゼ氏、原告、私自身は、スナップ号の船上にいった。それは、五月一日から六日であった。木曜日であったと私は思う。明かりをとるのが少々困難であった。しかしあとになって、我々は夜警のランプを使用した。我々がランプを手に入れた時には、ボイラーは一杯になっていなかった。今はボイラーを調べるためにすべてが整っている。

署名 J・H・ウィグナル

法廷が二時まで延期され、原告は、被告と船上のハイゼ氏に直ちに伝達し、ボイラーの検査のために必要なあらゆる便宜を提出することを引き受けた。

二時に、当事者双方が出廷した。

フレデリック・ハミルトン・スミス・スコット (Frederick Hamilton Smith Scott)、神戸在住のバルカン・ファウンドリー

号の元機関士、英国臣民は正式に宣誓して陳述した。私は、スナップ号のボイラーを調べた。私は、かまの頂部と側面を調べた。私は、いくつかの個所で、十分重ならないように、板が一インチ半から二インチ切り過ぎになっており、結果としてリベット穴が、八分の三インチから半インチ中にあるのではなくて、板の縁にぴったりくっつくぐらい切り過ぎになっていることを発見した。一〇ないし一二個のリベット穴がそういうふう

に作られていたと私は言いたい。結果として、まいはだ詰めの余地が十分ではないのである。継ぎ手が三倍となつたので、何枚かの板が割れてしまった。割れた原因は、作業員が穴を平行にするために、石灰のかわりにドリフトを使用したか、部分的に冷えたときにリベットを打ち込んだかのいずれかであると、私は言いたい。左舷ボイラーは、三個所、すなわち頂部と、両側の三倍の継ぎ手でひどく水漏れしていた。私は、作業が手ぎわよくなされたとは思わない。それによって、私は、板の縁が、それが巻かれる前にあったはずのように、均等に切断されなかったと言っているつもりである。

私は、カルカタではジャーディン・スキナー (Jardine Skinner) 商会の蒸気船パッシン号、H・E・サー・リチャード・グレイブズ・マクダネル号、ヨット、ビクトリア号の一等機関

料 資

士であつて、中国の帝国税関事務所の二等それから一等機関士でもあつた。左舷ボイラーは、板を取り出して再度全面的に作業をしなければ調子をよくすることはできないと私は考える。中央ボイラーはうまくすんではないが、他のものほどひどく漏れているわけではない。多分、それは、五五ポンド強の冷水の圧力に耐えるであらう。私は、左舷と中央のボイラーが航海に適するように作業がなされたとは思えない。右舷ボイラーは合格とするが、しかしよい仕事としてではないし、リベットの打ち方は縁に近づき過ぎている。

署名 F・C・H・スコット

ジョセフ・ハドソン・マクレガー (Joseph Hudson Magre-
son)、米国蒸気船ジャイアント号に居住するボイラー修理人、
アメリカ市民は正式に宣誓して陳述した。全般的に、私は、彼の意見に賛成する。私は、作業が手際よく果たされなかったと考える。リベットの頭と板の縁の間は八分の五インチあいており、約二箇四分の一インチの重複をとっていると、私は言いたい。現在、リベットは板の縁を越えて曲がっている。そのようになつたリベットが、左舷がまには一四ある。板の縁を圧迫するリベットが、中央がまに一七か一八個、右舷がまには九個ある。板の縁は適切に水漏れ防止がされておらず、十分な鉄が使

用されていない。左舷がまのリベット穴はひどく水漏れしており、頂部の重なり部分も同様である。各々のかまの頂部の接合部も漏れている。蒸気が通つたときには、それらがひどく漏るだらうと言いたい。修理された箇所をもつそのボイラーは航海に耐えることができないと私は考えている。それらは、圧力に耐えきれない。

署名 J・H・マクレガー

ウィリアム・ハイゼ、神戸在住の土木技師、ドイツ臣民は正式に宣誓して陳述した。給じて、私は、最後の二人の証人と同じ見解である。右舷ボイラーは合格させたい。それは少々漏るが、それは水漏れ防止が可能である。他の二つのボイラーを水の漏らないようにするためには、板をとりはずすことが必要である。他の二つのボイラーの作業を行うにあたり、原告は、船のためになる作業を本当に全く行わなかったと私は主張したい。

署名 W^m・ハイゼ

原告側から二つのボイラーにおいて台なしにされた鉄の価値をさらに主張したことにより、被告は彼の申立を修正することを許された。

J・H・ウィグナル、被告は再審問された。各々のボイラー

には低地ムア鉄の板が供給されており、各々の板は約四八〇ポンドの重さであったが、いくつかは切り離されていた。切り離されたものは、何の価値もない。鉄は一ポンドにつき一〇セントである。それは九六ドルの費用がかかる。私は一〇ドルのリベットをも与えたが、取り除かれたときには役に立たない。取り除いて売却すれば、鉄は古鉄として買われるだけであって、二〇ドル以上の値では売れない。各々のボイラーは同一の仕事が必要としていた。

署名 J・H・ウィグナル

これで被告のための証言を終える。

被告は審問されることを望まなかったが、その作業がなされてから経過した長い時間と、申し立てが五月七日に提出されたにもかかわらず、ウィグナル氏が必要な道具を提出しなかったから、調査がこの日まで完成しなかったという事実とを指摘したい。

判決は、明日、六月六日木曜日一〇時に申し渡される。

一八七二年六月六日木曜日。当事者双方は出廷した。

事実認定

本件訴訟において、スム・フン・ファンは、ジョセフ・ヘンリー・ウィグナルを相手取り、原告が作業の進行にともない週

217

三八〇ドルの支払いを受けることと引き替えに、被告の財産であるガンボートにある三つのボイラーについているかまの頂部と両側面を取り替えることに同意した契約により、三二二ドル一〇セントの支払いを求めて訴を提起している。板と材料は被告によって供給されねばならない。作業は満足するように完成されねばならない。ボイラーは六〇ポンドの冷水の圧力に耐えねばならない。原告は、三二二ドル一〇セントを残す五七ドル九〇セントが支払われたことは認める。

被告は、作業が満足いくようには完成されず、この主張が被告が提出した三人の証人の証言によって明確に裏付けられていると主張する。W・スコット、機関士、W・マグレガー、ボイラー修理人、およびW・ハイゼ、土木技師、これらのものの全員は、三つのかまのうち二つが、危険で契約における上記の試験に耐えることができないほどにまづぐ修理されたという点で一致している。しかし、ボイラーのひとつは、完成させられたものと考えられうるし、原告が効果的に執行された作業の価値を回復する権利を与えられているとすれば、各々のかまに対してなされるべき作業が平等であったということが証拠としてあるので、原告は、そのボイラーについて一二六ドル六セント、あるいは三八〇ドルの三分の一の支払いを受ける権利がある。こ

料の金額のほかに、原告は五七ドル九〇セントを受け取っており、被告は、原告によってだめにされた材料の価格として一〇六ドルを請求している。二つのかまを完成するためには、原告によって差し込まれた板を取り除かねばならず、これらの板は再び作業の目的には役に立たなくて、古鉄として売却されねばならないということが判明した。この方法でそれらが売却されねば、原告の未熟な技量による被告の損失は八六ドルとなろう。この金額と五七ドル九〇セントをあわせると、効果的に執行された作業の価値以上の金額になるのであって、それゆえ、原告は本訴において一切回復できないというのが私の意見である。

判決

それゆえ、私は、本件が訴訟費用なしで却下されるべしと判決する。私は、被告が彼によって願ひ出た調査の費用として一六ドルを裁判所に支払うべしとも判決する。

署名 H・S・ウィルキンソン

副領事にして領事代理兼判事

兵庫大阪英国領事館の印

Na 44

(63) 又兵衛対ジョセフ・ヘンリー・ウィグナル

女王陛下の地方裁判所 兵庫

一八七二年六月二〇日月曜日

又兵衛

対

ジョセフ・ヘンリー・ウィグナル

原告は、石炭五トンの代価として三〇両を請求している。

被告は、主張されるようには、負債が決してないと陳述した。

原告が指定された時間に出廷せず、被告が訴訟の防禦のために出廷したので、訴因が削除されるべしと命令された。

午前一〇時四〇分まで待った。

署名 H・S・ウィルキンソン

女王陛下の副領事にして領事代理兼判事

兵庫大阪英国領事館の印

No
45

(64) ウィリアム・ハウルズ対ヒュー・ウィリアム・

ハガート

女王陛下の地方裁判所 兵庫

一八七二年六月一日火曜日

ウィリアム・ハウルズ

(William Howles)

対

ヒュー・ウィリアム・ハガート

原告は、蒸気船ライジング・
サン号の調査料として三〇ド
ルを請求する。

被告は、ライジング・サン号の所有者である斗南藩当局の代
理人として行動し、彼自身は個人的に責任があるとは考えてい
ない主張する。

被告は、たとえ彼に責任があるとしても、調査費として請求
された金額は高過ぎるということも主張した。

法廷は、本件は和解すべき案件であると示唆する。

そこで、原告と被告は、相談の結果、被告が原告に一五ドル
と訴訟費用三ドルを支払うことで合意したと法廷に伝えた。

署名 H・ハウルズ

署名 H・W・ハガート

(220)

署名 H・S・ウィルキンソン

女王陛下の副領事にして領事代理兼

判事

兵庫大阪英國領事館の印

(65) ライザー・ゲッティンガー対ジェームズ・ウッ

ド

女王陛下の地方裁判所 兵庫

一八七二年六月一日火曜日

ライザー・ゲッティンガー

対

ジェームズ・ウッド

原告は、一八七二年六月の一カ月
の家の賃借料として二三ドルを請
求する。

被告は、修理に費やした金額よりも少ない賃借料の減額を申
し出たと主張する。

法廷は、本件が和解すべき案件であると示唆した。そこで、

原告と被告は、相談の結果、被告が請求された金額を支払うこ
とに合意し、原告が、被告がそのもとにある契約上の既得権を
侵害せずに被告に修理代として一四ドルを支払うことに合意す
る、と法廷に伝えるものである。

(221)

署名 ライザー・ゲッティンガー

署名 ジェームズ・ウッド

署名 H・S・ウィルキンソン

副領事にして領事代理兼判事

兵庫大阪英国領事館の印

(66) くま対 J・H・ウィグナル

No. 49

女王陛下の地方裁判所 兵庫

一八七二年六月二五日火曜日

く ま

対

J・H・ウィグナル 求する。

被告は、商品を決して受け取らなかったと主張する。

又兵衛は、真実を語るようにと正式に警告されてから、以下のように主張する。昨年六月に、被告の番頭久米吉が兵庫の東出町にある私の家によって、石炭を購入した。どれぐらい買ったか覚えていない。ずっと前のことなので私は忘れてしまった。しかし、私は、店にある帳簿には書き留めた。私は、その番頭から受領書を受け取った。私は、それらの受領書を持つ

222

ていって、被告にそれを何回も示して支払いを請求した。石炭の代金は覚えていない。私の番頭がここにいるが、彼は覚えていない。彼の名前は十兵衛である。それから、私は、代金の回収のために番頭を遣わした。

被告による反対尋問。私は、雇った沖仲仕を使って石炭を送った。私は、彼らに、海岸の被告の鋳物工場に石炭を持っていくように指示した。私は、一緒にはいかなかった。

署名 むし又

利助は、真実を語るように正式に警告されてから、以下のよう
に主張する。私は、原告の妻から外国文で書かれた書類を受
け取ってから、それを持って被告のところへ行つて、石炭の代
金を支払うように頼んだ。彼は、その書類を私から取つて、手
の中で巻いてから、日本の石炭は一切買わなかったと言った。

私は、彼にその書類を返すように頼んだが、彼はそうしようと
はしなかった。私は、それらを持たずに帰らねばならなかつ
た。このことは、被告の家の炊事場での出来事である。

被告による反対尋問。このことは、四月一九日に生じた。私
は、石炭を配達したものではない。原告が税関に訴えた時に
は、私はいなかった。彼と一緒に行かなかった。

署名 利助

223

くまは、真実を語るように正式に警告されてから、以下のよう
に主張する。私はこの人の親類ですと、原告を指さした。彼
の名前は伊介です。彼は、私の家に住んでいます。彼が私の家
を引き継いだときに、又兵衛と呼ぶように提案しました。私は
石炭を売ったことを覚えております。それは昨年の六月でし
た。崩吉という人がやってきて、石炭を注文しました。市造が
そのときの私の番頭でした。彼は、江戸行きの船に乗って行
ってしまった。石炭を運んだのは彼です。私は、そのときどの
ような受領書ももらっていません。約一〇日後に、私は、
久米吉のところへ金をもらいに行きました。久米吉は被告の白
人屋敷に住んでいました。そこには外人が一人いました。彼
は、被告よりも若い人でした。彼は、今は金を支払えないが、
文書をあげると言いました。一トンにつき六兩で、被告のこ
ろへは五トンが送られました。私は、その外人からもらった文
書を十兵衛に渡しました。十兵衛は、現在、利助と言っている
ものと同一人物です。そして、集金のために、彼を遣わしまし
た。

被告による反対尋問。私は、この人を前に見たことは決して
ありません。(日・マイルズを見て)。私は、石炭が配達される
のを見ていません。それは市造です。

224

署名 くま

法廷は二時で休廷となった。

法廷は二時から開廷されたが、重要な証人久米吉が欠席した
ので、法廷は、六月二六日水曜日の朝一〇時まで延期された。

一八七二年六月二六日水曜日

法廷は一〇時に開廷された。

久米吉は真実を語るように正式に警告されてから、以下のよ
うに主張した。私は、幸助という人をよく知っていた。しばし
ば、私は、ウィグナル氏のために彼から石炭を購入したが、い
つも、私は、石炭が引き渡されたあとで札を渡した。それは、
多くの石炭が引き渡されたあとである。札には、トン数と値段
が書かれていた。昨年九月に、私は、大阪へ行った。私は、ウ
ィグナル氏のところにそれまでいたのである。私は彼の番頭で
あった。最後にいつ幸助から石炭を買ったか覚えがない。受領
書を渡すまで一〇日経ったことは決してない。私が買った石炭
の大部分は、幸助からである。私は、彼の家に石炭を注文し
た。私は、崩吉を派遣した。私は、この婦人がウィグナル氏の
ところへ来たことを覚えていない(くまを指さして)。

被告による反対尋問。石炭の受領書を書いたのはいつもマイ
ルズであった。他には誰も受領書を書かなかった。私は幸助か

225

ら石炭を買った。以前、幸助は神戸のハレジユ(Haréju)のところに住んでいて、石炭の店を持っていた。当時、私は、彼から石炭を買い、彼が網仲町に移ったときには、私は、そこで彼から石炭を買った。私は、幸助の石炭が粗悪なときには、東出町のカヤシヨースケからも石炭を買った。私は、大阪へ行つたあとしばらくしてから、神戸に來た。私は、一日だけときには二日だけ滞在した。そのとき石炭の代金が支払われていないことについて、誰も私のところへ不平を言いに来なかった。私は、病氣であつたから、兵庫からあまり遠くへ行かなかつた。法廷に対して。私はこの婦人を覚えてゐる(くまを指さして)。彼女は網仲町に住んでゐる。そこは、東出町から二丁離れてゐる。幸助とこの婦人は同じ家に住んでゐる。

署名 久米吉

久兵衛は、真実を語るように警告されてから、陳述した。私は、この人に二ないし三回會つたことがある(利助を指さして)。私は彼の名前を知らない。彼は、ウイグナル氏の家の私の部屋に來た。私はウイグナル氏のコックである。ウイグナル氏が不在のときに、彼はやつてきた。彼は、ウイグナル氏がゐた時に一度やつてきた。私は、彼がウイグナル氏に話しかけたかどうかは言えない。そこには他の召使いもいたが、彼らはウ

イグナル氏に話しかけた。私は、この男が彼に話しかけたかどうかについては言えない。このことは先月のことであつたと思う。彼は、何のために彼が來たかということを私に言つたが、どのような文書も見せなかつた。

署名 久兵衛

法廷は二時まで休廷となつた。

法廷は二時に再開された。

崩吉は、真実を語るように警告されてから、陳述した。私は、網仲町を知つてゐる。私は、くまが住んでゐる家を知つてゐる。幸吉はそこに住んでゐる。私は、そこへ行つて石炭を買つてくるように久米吉に命令された。私は、一回だけ行つた。私は、それがいつであつたかは覚えてゐない。それが二カ月前であつたかどうかについて言えない。六カ月から七カ月前であつたと思う。それは、久米吉が大阪へ行く前であつた。私は、久米吉がいつ大阪へ行つたかは知らないが、そのことは彼が大阪へ行く前のことであつた。私は、それらが石炭であると言つただけである。量は、久米吉が言うことになつてゐた。私は、石炭の受領書については何も知らない。私は、支払いの申し込みについて何にも知らない。私は、知つてゐるとは誰にも言つたことは一切ない。私は、この男(利助)について見覚えがな

い。

署名 崩吉

証人は、日本式の彼の印を書くことができなかった。

又兵衛が再度召喚され、陳述した。その家は本当はくまのものである。くまは未亡人である。彼女は現在独身である。

署名 伊介

法廷に対して、くまが真実の原告であることが判明し、彼女の名前が又兵衛の代わりに用いられている。

ジョン・ヘンリー・ウィグナルは、正式に宣誓して陳述した。私は、この男(利助)に以前に会ったことは記憶にない。私の記憶では、彼の手から領収書を受け取ったことは一切ない。私は、金を支払わずに人から領収書を受け取ったことはない。私は、日本人から石炭を買ったことは一切ないとホール氏に言ったのである。

被告は、提出すべき証人がいないと述べた。

事実認定

本件訴訟において、くま(その名前が又兵衛の名前のかわりに用いられている)は、原告により被告に売却された石炭の五トンの代価として三〇両の金額の支払いを求めて、ジョン・ヘンリー・ウィグナルに訴を提起している。私は、被告が石炭を

受け取ったことを確信している。私は、証人利助が被告に受領書を持っていき、被告がそれを破ったと信ずる。この結論に至るうえで、私は被告の証言を看過することはなかったが、残念ながら、被告は、その証言を与えるうえで、故意かつ不道徳な偽証の罪を犯していると言わねばならない。

判決

それゆえ、私は、被告が原告に三〇両と訴訟費用三ドルを支払うべしと判決する。

そして、被告の証言について私が形成した確信について、刑事裁判改良法 (14 & 15 Vict. C 100) 第一九条によって与えられている権限を行使するかどうかについての決定を留保するものである。

署名 H・S・ウィルキンソン

女王陛下の副領事にして領事代理兼

判事

一八七二年六月二十六日

兵庫大阪英国領事館の印

(原文二二九頁は空白)

(67) 死因審問

死因審問

中国と日本にいる英国臣民の統治についての一八六五年の枢密院令 第五三条

兵庫

トーマス・マッケンジーの死体について、兵庫港に停泊中の蒸気船ティバー号上にて執行された審理

ハイラム・ショウ・ウィルキンソン、女王陛下の副領事にして領事代理、検死官代理の前で

マシウ・タウンゼンド・ビートン・マク

ファーンソン

エドワード・ヘイズリット・ハンター

フィリップ・サミュエル・カベルデュー

(Philip Samuel Cabellu)

陪審員

正式に宣誓した。

検死官と陪審員は、死体の状態の詳細について以下のように書き留める。

死体は、機関室の天窓の上にあるマットレスに横たわっている。死体には、頭の左側にある裂傷を除いて、暴行の跡はなかった。

ヒュー・マケビット (Hugh McKevitt) 蒸気船ティバー号

(230)

の甲板長は正式に宣誓して陳述した。故人と私は、昨日の午後、水浴びをしていた。水浴びを終えたときに、私は、外輪軸に入った。私は、自分自身を乾かしながら、故人に背をむけてシャツを着た。どのようにして水浴から上がってきたのか知らないが、彼は、私の立っているところへ上がってきて、我々は、互いにとりともなく話しかけていた。それから、私は、彼が「オー」と声高に言うのを聞いた。あたりを見ると、彼のふくらはぎが外輪の一部にさわっているのを見たし、彼の頭の左側は、水際から約八インチ上の浮袋のへりにあたっていた。それから、彼は、ひっくり返って、足から先に落ちていった。それから、私は、彼が落ちたところへ、できるだけ早く降りていったが、彼が水中で動かずにいるのを見た。さらに、私は、足で彼のわきの下をつかもうとして、目一杯力を低めた。彼をつかむことができなかったので、私は再び浮袋につかまり、それから彼は消えてしまった。それから彼を見ることはなかった。そこで、私は、外輪軸おいの扉に行つて、大声で二等機関士のジョーンズを呼んだ。また、火夫全員を大声で呼んだ。そして、火夫が全員走ってきたし、ジョーンズと、二等航海士のブルックス氏も一緒に走ってきた。私は、彼らにマッケンジーが消えた場所を示したところ、火夫である一人の日本人がマッ

ケンジーのあとを追って飛び込み、他に三人が続いたが、マッケンジーを見つけることができなかった。そこで、はしけが、何か潜水器具がないかどうか調べるために、英国軍艦に派遣された。何もなかったのであるが、英国軍艦は、二人の乗員を派遣し、彼らは、二度か三度、潜水した。私は、そのうちの一人が海底から石か泥を持ってきたのを見た。そこで、私は、引っかけいかりを求めに軍艦に行き、操舵員と私とで、六時半か七時半頃まで、いかりでマッケンジーを捜した。それから私はお茶を飲んだが、私が終えてから、二等機関士のジョーンズ氏が、八つの鉤をいかりの棒に結びつけるために私を呼んだ。それをやってから、鉤のついた引っかけいかりをカッターボートに積み込み、舷門に沿ってから、右舷側を前のほうへさらった。右舷外輪おおいの前きたときに、私は引っかけいかりを強くひっぱり、また投げ込んで船の後部にむけてひっぱった。私は、マッケンジーが消えたところにはとんど近いところで彼の死体を引き揚げたことができる。彼は甲板上に運ばれ、主ハッチに沿って置かれた。それから機関室天窓に置き換えられ、そして、医師が来るまで、航海日誌の指圖書に従って、一等航海士と一等機関士とが彼を管理した。陪審に対して。(あなたは、マッケンジーとの会話を記憶し

232

ているか。)彼は水の上にあおむけになって浮かんで、あなたはこのように浮かぶことがどうして容易なのか不思議だろうと言った。しかし手を上へ揚げれば、あなたは沈む。私は、「水を割れないならば、あなたはそれができない」と言った。私は、そのようなものの見込みは全くないし、あなたは泳いでいたいのだろうと言った。あとで彼が衝突した浮袋に私がのつたときに、彼は、「見よ、何と人は浮力があるのか。みよ、何と小さいものがあなたを浮かせているか」と言った。このとき、彼は、一方の手で外輪をつかんだ。それから、私は、彼が落ちたときにいた場所にあがり、彼が言葉を残したが、私は、それらが記録するに値するとは思わない。事実、そのあと彼が私に言ったことで覚えていることは、私の言ったことに答えて、「今、私はカクテルが飲めた。もう一杯飲もう」ということだけである。

彼は、見事な泳ぎ上手であった。泳いで船のまわりを一周することができた。

彼が水に落ちたあとの彼の動きを私は見なかった。我々が海にはいったのは四時であった。私は、彼より二、三分早かった。我々は、船尾のまわりを、ひとつの外輪おおいからもうひとつの外輪おおいへと泳いで、それから私は税関のはしけに上

料

資

がった。私がそのはしけにいた間中、あるいはほとんどの時間、彼は、あおむけになっていた。彼が水にはいる前に、私は、しばらく彼と一緒にいた。私は全く酒を飲んでいなかった。彼が酔っているようには見えなかった。私は甲板長で、彼は機関士である。我々は、非常に仲がよかった。私は、そのとき、太陽が強かったかどうか覚えていない。その影響を感じた記憶はない。

署名 ヒュー・マケビット

フレデリック・ジョーンズ、蒸気船テイバー号の二等機関士は、正式に宣誓して陳述した。彼が水浴に外に出る前に、私と一緒に行きたいと望んだことを記憶している。私は、かなり早いと言った。私は、夜遅くまで泳ぎたくなかったのである。それで、彼は、私を残して服を脱いで出て行った。彼が死ぬ前に、私は、左舷の外輪おおいから二〇ヤードはなれた海中に彼がいるのを最後に見た。何か起こったのではないかと私が感じた暗示は、甲板長が私の名前を二度か三度叫ぶのを聞いたことである。甲板長が私を呼んだときに、私は、船の前方、船首楼の外にいたが、二回目に呼ばれたときに、彼のところへ駆けつけたが、火夫の何人かが、すなわち二人の火夫が私に続いた。そこで、甲板長が、「大変だ。マッケンジーが沈んでしまった」と

言った。私についてきた二人は、私が服を脱いで飛び込む前に、海中にはいった。この時までには、船の乗組員全員が舵輪のまわりに集められ、潜水が四〇分近く続けられたが成果はなかった。それから、私は、機関士長を捜すために船を離れた。陪審に対して。その前半、私は、彼と一緒に働いていた。彼は、夕食にビールを飲み、ジンを二度——一度は午後、一度はボイラー室で——飲んだ。彼は、かなり飲む習慣があった。私の知る限り、彼は発作に陥りやすいことはなかった。甲板長が叫んでから、死体が引き揚げられるまでは、四時間前後である。死体が揚がってきたときに、私は、舷門の底でそれを受け取った。太陽は、水浴びするほど強くはなかった。そちら側では、あなたは服を着ることができた。彼は、ちょうど機関室の作業から帰ってきたばかりなので、非常に体がほてっていたのである。その時、半分は日光の中、半分は日影を、彼は船のまわりを右に泳いだ。甲板長の叫び声を私が聞いたのは、推測するかぎり、ちょうど二点鐘がうたれたとき——五時から五時半の間——であったと思う。

彼が引き揚げられたのは、九時一五分であったと思う。ビールについて言ったことを訂正したい。普段、彼は夕食にビールを飲むが、昨日は飲まなかった。

署名 フレデリック・ジョーンズ

トーマス・チャールズ・ソーニクラフト (Thomas Charles Thornicroft) 予備役軍医 (イングランド) は、正式に宣誓して陳述した。ブラウン船長が、その機関士を診るために船に来るように、私を呼びに来た。これは、およそ九時半頃のことであつた。私は家を出て、天窓の死体を診た。彼は完全に死んでいた。彼は、左側頭部に裂傷を負っていた。他には全く傷がなかった。彼は、落下して気を失い、後で溺死したにちがいない。私の意見では、溺死が實際上の死因であつた。頭の傷は、何か固いものに落下して生じたのであろう。

署名 トーマス・チャールズ・ソーニクラフト

予備役軍医 (イングランド)

陪審の事実認定

故トーマス・マッケンジーは不慮の溺死によつて死に至つた。昨日一八七二年七月六日夕刻五時から五時半の間に、故人は、蒸気船テイバー号の外輪から偶然落下した。外輪の浮袋のひとつに頭がぶつかり、気絶して頭に傷ができた。それから、彼は水中に沈み、溺死したのであつて、誰にも罪はない。

陪審員

235

署名 マシュー・タウンゼンド・ビートン・マクファーンソン

エドワード・ヘイズリット・ハンター
フィリップ・サミュエル・カベルデュ
1

署名 ハイラム・ショウ・ウィルキンソン

女王陛下の副領事にして領事代理
検死官代理

兵庫大阪英國領事館の印

(68) 女王対チャールズ・ヘンリー・コブデン、エド

ワード・フィッツジャー、アーサー・ヘスキス・グルーム、チャールズ・オクスレイ

刑事

女王陛下の地方裁判所にて 兵庫

一八七二年七月一二日金曜日

女王、亜慶の訴による

対

チャールズ・ヘンリー・コブデン
(Charles Henry Cobden) No 7 実際の身体傷害を引き起こ

236

料

した重慶に対する暴行

資

エドワード・フィッシャー No. 8
アーサー・ヘスキス・グルーム
(Arthur Heskeith Groom) No. 9
チャールズ・オクスレイ
(Charles Oxley) No. 10

女王、重高の訴による 実際の身体傷害を引き起こした重高に

対 対する暴行

同一人物 No. 11 ~ No. 14

女王、端仁の訴による 実際の身体傷害を引き起こした端仁に

対 対する暴行

同一人物 No. 15 ~ No. 18

被告人は、無罪を申し立てた。

領事館付の助手、ジョン・カーリー・ホールが、裁判所の指示により、女王の側の陳述を開始した。

ベンジャミン・ローリング、居留地会議に雇われている警察官は正式に宣誓して陳述する。先月、六月二日土曜日、夜一二時頃だったと覚えてゐる。私は、何人かの外国人を見た。私が知らないのが二人いた。フィッシャー氏、グルーム氏、コブデン氏、ステイブルズ (Stables) 氏がいた。フィッシャー氏、グルーム氏、コブデン氏が被告人であると認める。その夜、チ

ヤールズ・オクスレイ氏は見なかった。私の知るかぎり、彼はその一団にはいなかった。当初、その一団には六人しかいなかった。最初、私は、駐在所の前で彼らに会った。一時から一二時の間、私は、駐在所の扉の所に座っていた。私は、彼らに、賭博場を教えてほしいと頼まれた。私に聞いたのがグルーム氏であったか、コブデン氏であったかははっきりしない。私は、行つて教えようと言つた。彼らに教えはじめたのは、一時ではなく一二時頃であつた。私の目的は、彼らの居場所を教えることだけであつた。彼らは、一軒の賭博場、唯一軒にのみ入つた。我々が行つたその一軒の賭博場には人がいた。その賭博場に誰がいたかは言えない。賭博場は、コック・アイの裏の倉庫の中にあつた。その一団は、倉庫に入つていった。私は、彼ら全員が倉庫に向かつていくのを見た。扉は半分開いてゐた。私と一緒にいたその一団のうちの四人か五人がその倉庫に入つた。私は、彼らが中に入るのを見た。何人かは外に残つてゐた。三人か四人である。誰であるかは言えない。私は、扉が半分開きであるのを見た。誰が中に入つたか言えない。私は、その一団の中の何人かが倉庫に入るのを見た。三人あるいは四人以上が入つたかどうか言えない。その一団の何人かは外に残つてゐた。私は、その倉庫の外にはいなかった。中に入つてゐた

のが誰であるかがわかるにはあまりにも暗すぎた。暗すぎたので、誰が外に残っていたのかはわからない。私は、コック・アイの角から六フィートぐらい離れて立っていた。倉庫からは三〇ないし四〇フィートぐらい離れていた。しかし、角を曲がったところであった。私は、一人の中国人を追いかけてその一団の何人かが倉庫から出てくるのを見た。彼らは、一人の中国人を連れ出した。彼らは、彼を追いかけて走っていた。私に見えなかりで、彼らは、その中国人をつかんではいなかった。ステイブルズ氏と知らない二人とが、日本の警察官が来るまで彼をつかんでいた。彼らは、彼を地面におさえつけていた。私が陳述したその人達以外には、その一団の他の誰も見なかった。私は離れて立っていた。ブルドッグが一頭いた。中国人が地面にころがっている間、ブルドッグは彼にふれなかった。しばらくの間、彼は、コック・アイの角の地面にほっておかれた。中国人がそこに置かれたときに、その一団の幾人かがコック・アイの扉に入った。フィッシャー氏、コブデン氏、グルーム氏であったと私は思う。グルーム氏については確かではない。私は、ステイブルズ氏が足の裏の扉を壊すのを見た。ステイブルズ氏と一緒に三人以上いた。二人の見知らぬ者がいた。四番目が誰であったか覚えがない。中国人は、縛られずにそこ

339

に横たわっていた。その中国人は、その一団がコック・アイの裏の扉に行ったときには、手が自由であった。日本の警察官がやってくるまで、彼は縛られていなかった。私は、二人の日本警察官が彼の両手を縛るのを見た。これは、コック・アイの背後にその一団が二度目に行きはじめたときであった。第一の中国人がコック・アイの角に置き去りにされたときに、一団がコック・アイにはいたか倉庫に戻ったかは、はっきりいえない。私は、賭博場を彼らに教えるために一緒に行った。賭博場はすべてしまっていた。唯一つあいていたのがこの倉庫であった。その紳士たちの何人かがその倉庫にはいり、私は、町角から六フィート離れたところに立っていたのであるが、一人の中国人が走るのを見たし、ステイブルズ氏とグルーム氏と見知らぬ者のうちの一人が彼を監視していた。その一団の残り——その一団の一部のことである——は、再びあとへ戻り、ステイブルズ氏がその店の扉を破壊し、それから中国人の靴屋が一人連れ出された。柵が破壊され、三番目の中国人が他の二人と縛りつけられ、それからステイブルズ氏が日本の警察官に裁判所に連れていくようにと言った——フィッシャー氏、グルーム氏、コブデン氏と二人の見知らぬ者が居合わせた——。我々は、中央通りへと戻ってから別れた。ステイブルズ氏とコブデン氏が

339

駐在所にやってきたときに、彼らは、小さいステッキを持っていた。それ以外のステッキは全く見なかった。その一団にはブルドッグが一頭いた。その夜、私が彼らと別れたときには、ブルドッグはまだ彼らと一緒にいた。そのブルドッグは何もしなかった。私は、ブルドッグがコック・アイにいるのを見た。犬は、危害を加えずに立っていた。ブルドッグは倉庫の近くにいた。最初に連れ出された中国人は、背が高い男であった。私は、彼が日本の警官によって他の二人に縛りつけられるのを見馴れた。三番目の男は靴屋であった。彼は、店の表の扉から連れ出された。二番目の男は、その一団の中の二人によって連れ出された。しかしその二人が誰であるかは覚えていない。誰が彼の弁髪をつかんだのか知らない。彼らは、彼の腕をとって連れ出した。最初の中国人と靴屋が出てくる間に、他に中国人は誰も出てこなかった。靴屋は背が低かった。

フィッシャー氏による反対尋問。私は、コック・アイの角に立っていた。彼らがいる前に、中国人がその一団と一緒にいるのは見なかった。私は角に立っていたので、中国人が彼らと一緒に入っていったかどうかは言えない。あなたは、フィッシャー氏とコブデン氏がコック・アイの裏から入っていったと、断言できるか。私は断言できない。そう思うだけである。あな

たは、彼らが倉庫に入っていたか、コック・アイの背後に入っていたのか断言することができないと言うのですね。はい。彼らは角をまがっていたので、彼らが通りに残っていたかどうか、私は言えない。ステイブルズ氏が日本の警察官に裁判所に彼らを連れていくように言ったときに、フィッシャー氏が居合わせたかどうか、あなたは断言できるか。正確に断言することはできない。あなたは、私が積極的な役割を果たすのを見たか。一切殴るようなことは見なかった。

チャールズ・ヘンリー・コブデンによる反対尋問。あなたが駐在所に座っていたときに、私があなたに何かきいたかどうか言えるか。それが、あなたか、ステイブルズ氏か、ブルーム氏かであるかは言えない。私は、あなたがコック・アイのうしろから倉庫に入ったかどうか言えない。あなたは、私が倉庫がコック・アイの数人の中にいたと言っている。あなたがいたかどうか私が断言できないのは当然である。

チャールズ・オクスレイによる反対尋問。あなたは、二人の見知らぬ者がいたと言う。これらの見知らぬ者が私でありえたか。あなたは私の声を知っているか。あなたは私を確認しえなかったのではないか。私は、あなたを見違えることはできない。このことが起きたときに、私は、ひとつのニュースとして

あなたに伝えた。次の朝、私が当直である時に、我々は居留地を歩いていった。私は、それが翌朝であつたかどうかは断言できない。二匹の小犬があなたと一緒にいたのは、日曜日ではなくて、月曜日であつた。私は、事件の夜小さい犬を一切見なかつた。あなたは、中国人がその事件に私を巻き込もうと挑んできたが、私がそれを拒絶したのを見たか。見た。それは、オリエンタル銀行の裏手であつた。あなたになれなれしくやってきたように見えた。ホール氏は、私がその一団の一人であるという意味のことを言うようにあなたに依頼したか。彼は、あなたに、私がその一団のうちの一人であるかどうかを反対尋問しなかつた。彼は、あなたがその一団の中の一人であると考えていると言つた。

アーサー・ヘスキス・グルームによる反対尋問。ステイブルズ氏が賭博をしていたということで彼らを裁判所に連れていくように言つたと私は理解した。ステイブルズ氏の日本語を理解するに十分なほど、あなたは日本語がわかるか。できない。私は裁判所ということばはわかつた。裁判所をあなたはどうか考えているのか、税関か監獄か。

ホール氏による再尋問。私は、日本の監獄でこれらの男達を見た。

署名 B・ローリング

亜慶は、証言法の再修正法（一八六九年、32 & 33 Vict. C. 68）の中で示された形式によつて、厳肅に誓つて宣言したのち、（偽りなく翻訳することを厳肅に誓い宣言したア・インを通じて）陳述する。

昼食のため、法廷は、本日午後一時半まで閉廷となつた。被告人は、誓約書なしで外出することを許された。

亜慶は、（上記のように厳肅に宣言したが）、尋問に際し陳述した。私は、八〇番に住んでいる。その場所の名前は、クワンタイの倉庫である。倉庫は、クワンタイの家の背後にある。私は、二階に住んでいる。端仁は、私と一緒に住んでいる。私は、五月一七日のことを覚えてゐる。それは土曜の夜であつた。私は一時に寝た。一二時に物音が聞こえたので、起きた。私はこわかつた。私は、二人の紳士が二階に上がつてくるのを見た。二人の紳士を見たときに、私は下へ走り下りた。私は、何人かの紳士がはしごの下にゐるのを見た。紳士の一人が私の腕をつかまえ、ステッキで私をたたき、犬がかみついた。私は、ステッキで鼻の頭と後頭部をなぐられ、犬がかみついた。犬にかまれた傷跡がある。私の足の傷跡は、犬の歯型である。それから、彼らは、私をクワンタイの家と反対側の角に連

れ出した。彼らのうちの何人かは私の弁髪をつかみ、何人かは私を押した。クワンタイの家の反対側まできたときに、私は、横になり、彼らのうちの何人かが私をたたき、ステイプルズ氏が私の弁髪を切った。彼らは、私をロープで縛った。私の弁髪が切り離されてから、私は、助けを求めて叫んだ。そのとき一人の紳士が、私に口を閉じろと言ひ、あるいは、「口を閉じなければ、殺すぞ」と言った。それから、彼らは、私をローリングに突き出した。それで、私はそこに立っていた。それから、紳士たちは、私の家のほうへ戻った。彼らが行ったのは、クワンタイの倉庫である。彼らが倉庫にはいるのを私は見た。そのあとは何も見なかった。縛られたままであったとき、私は、ティエン・チュンの倉庫の角の橋に近い家の角に立っていた。そこにはいくつかの石があった。それらの石のところに立っていた一人の人物は、みんなが倉庫に入っていくのを見ることができた。私は彼らに会った。約一五分ほどたつてから、私は、先の紳士たちが端仁を連れ出すのを見た。何人かは彼をつかみ、何人かは彼をひっぱった。私は、あの二人がその夜いたことを確認する（チャールズ・オクスレイとエドワード・フィッシャーを指さして）。その夜、あわせて一〇人いた。そのうちの二人、私が指さした二人がここにいる。ローリング氏は私をなぐらな

かった。紳士たちが倉庫へ戻ったときに、ローリングは私の近くに立っていた。ローリングは、彼が立っていたところから倉庫の戸を見た。しばらくは私は横になっていたが、再び起き上がった。私の手は縛られていた。その角からクワンタイの倉庫まで見ることができた。はっきり表現すると、Aは私が立っていた角であり、Bはクワンタイの倉庫の扉である。ローリングは私にびったりくっついて立っていた。ローリングは私を放置しなかった。彼らは私から離れると、私の家へ戻った。それから彼らは中にはいった。彼らのうちの五人が中にはいった。あとで、それらの紳士たちが端仁を外へ連れ出すのを私は見た。彼らのうちの何人かが端仁をつかんでおり、端仁は着物を着ていたが、助けを求めて叫んだ。問題の犬は端仁にかみついた。外で犬は端仁をかんだ。私は端仁が助けを求めて叫ぶのを聞いたが、それから、彼らは端仁を外へ連れ出した。それから、彼らは、端仁の腕をつかんで、私が立っていたところへ連れてきてから、彼を縛りあげた。そして、彼らは、私と端仁とを、クワンタイの家と向い側にある橋を過ぎたところへ連れていった。我々がクワンタイの家の向い側に立っているときに、私は、二人の紳士がクワンタイの家の扉を破壊するのを見た。彼らのうちの一人が中にはいり、一人は外に立っていた。そのの

ち、私は、ガラスと家の裏の扉がこわれる音を聞いた。そのあと、私は、クワンタイの家のの中にいる人の声を聞いた。そこで、私は、彼らが家の裏から一人の中国人を連れ出すのを見た。そして、それらの紳士たちは、その中国人を外へ連れ出してから、きびしく監視した。彼らが連れ出した中国人は、亜高であった。彼らは、彼の弁髪を、他の二人を縛りつけているロープにくくりつけた。日本の警察官は、この方法で亜高を縛った。それから、日本の役人が我々を税関まで連れて行き、我々は、月曜日の午後四時までそこに居た。税関ということによって、私は、彼らが私を監獄に入れたといっているのである。私は、四人の外国人によってロープで縛りつけられた。先に私が指さした二人の外国人は、彼らの中にいる。端仁が連れ出される前に、私が縛りつけられたあとで、日本の警察官はやってきた。私は、犬が端仁をかんだのを見た。その犬は他には誰もかんではいない。

A・H・グルームによる反対尋問。日本の警察官は、私を縛る手伝いをした。ロープは波止場から持ってきた。私は、縛られていたときには警察官を一人も見なかった。ローリングはここにはいなかった。そのとき月明かりがあった。あなたが私を縛るのを手伝ったかどうか誓っていうことはできない。

C・H・コブテンによる反対尋問。一時間に私は就寝した。外国人は一二時にやってきた。私は寝ていた。二階には小さいランタンがひとつあった。起き上がったときには、明かりがなかった。二人の中国人が二階に住んでいた。一階には、二人が住んでいたが、彼らは大阪に行っていたのである。外国人に雇われている中国人はその家には行かない。外国人が上がってきたときに、ランブがテーブルの上にあった。紳士たちはランブを壊した。私が下に行ったときに、彼らは私をなぐった。それから、彼らは、私を外へひっぱり出した。それで、私は、彼らが外国人であることがわかったのである。私は、あなたがそこにいたことを確認できない。外国人たちが二階に上がったときには、二人の中国人がいた。あまり多くを記憶していない。賭博はその家で行われていた。テーブルの上には、さいころも、ドミノも、現金も一切なかった。

E・フィッシャーによる反対尋問。階段の下のところには明かりがなかった。私は、扉の内側の一階で外国人を見た。私が横たわっていたときには、私の近くに一〇人の日本人が立っていた。私がローリングにつき出された時には、日本の警察官は一人もいなかった。あとで彼らはやってきた。一人の日本の警察官は私と一緒に立っており、一人は、倉庫へ紳士たちと一緒に

に行った。私は、外国人たちがランタンを持っているのは見なかった。私は、少しけがをしていたが、足がひりひりした。オクスレイがそこにいたのは確かである。その夜以前に、私は、オクスレイ氏に会ったことがない。私は、その夜より前に、あなたに決して会わなかった。あなたがそこにいたのは確かである。あなたが私を縛ったのは間違いない。確かにオクスレイ氏が私を縛った。十分な月明かりがあつて、雨が降っていなかったと確信している。彼らは、端仁を私に縛りつけた。誰が端仁を縛ったかは覚えていない。私を端仁に縛りつけたのが誰かを私は言えない。C(文書A上の地)は、彼らが端仁と私を連れていった所である。それは、Dの印をつけられているクワンタイの家の扉の反対側にある。彼らが亜高を後ろの扉の外へ連れ出したというときには、私は、彼らがその方向から来たと言っているつもりである。私は、音を聞いたが、それから、彼らは亜高を連れてきた。後ろの扉は、Eの印がつけられている。二人の紳士が、亜高を外へ連れ出した。私は、靴修理屋である。二階には三部屋あつた。照明はディナー・テーブルの上にあつた。私の友人、端仁と私は、別々の部屋で寝ていた。私は、端仁の寝息を聞いた。

C・オクスレイによる反対尋問。その夜以前に、私はあなた

に会ったことがない。あなたがどんな服装であつたかは言えない。あとから、私は、あなたがあばたで非常に目が大きいと説明した。あなたの服が明るい色だったか、暗い色であつたかは言えない。

署名 亜慶

トーマス・チャールズ・ソーニクラフトは正式に宣誓して証言した。私は、この男に見覚えがある。先週の土曜日に、彼は、私の家にやってきた。彼は後頭部を負傷していた。傷には絆創膏がはつてあつた。階下へ落ちたときに彼は負傷したに違いない。彼の足のどこが悪かったか言えない。足にはタールがべったりついていた。彼がどのようにして負傷したかについて、私は確定した意見を言えない。犬にかまれて負傷したのであろう。犬の歯によるもののような。もう一人の中国人のつま先がふくらんでいるのを私は見た。それは外傷によるものであろう。

C・H・グルームによる反対尋問。その中国人がやってきたのは先週の土曜日である。傷は、少しひどかった。全治するまでどれぐらいの日数を要するかはつきりいえない。

E・フィッシャーによる反対尋問。傷は、全治五日か六日であらう。絆創膏がはつてあつたのは三日間である。三日より長

かったと言えよう。

署名 トーマス・チャールズ・ソーニクラク

ト

端仁(ア・インの通訳を通じて厳肅に誓約し尋問される)が陳述した。私は、八〇番の倉庫に住んでいる。私は二階に住んでいる。二階には二人住んでいる。私と亜慶である。私は、五月一七日のことを覚えてゐる。その夜、私は、病気で寝ていた。突然、何人かの外国人が私の部屋に乱入してきた。そこで、私は、起きてベッドの上に座った。それから、私はベッドから下へ降りたが、何人かの外国人が私の喉のカラーをつかみ、もう一人が私の弁髪をつかんだ。それから、外国人たちは、私の部屋のすぐ外に私を放り出した。そして、私を杖でたたき、犬が私をかんだ。犬が私をかんだときに、私は起き上がれなかった。何人かの紳士が私の手をつかみ、手摺まで私をひっぱっていき、それから、一人の紳士が私を蹴り落とした。彼らは、しごから私を階下へ蹴り落としたときに、彼らは、私の頭を切り、私は床に倒れた。何人かの紳士は、私をもう一度たたいてから、手と弁髪をつかんで家の外へ連れ出した。それから、彼らは、亜慶のいる所へ私を連れて行って、ローリングに引き渡し、私を縛り上げた。彼らは、私をロープで縛ってから、数分

後に、私と亜慶をクワンタイの家の向う側へ連れていった。そのとき、私は意識を失ったが、しばらくして亜高がそばにるのがわかった。亜高がそばへきたときに、彼らは我々と一緒に縛り上げ、日本の警官が日本の税関へ我々を連れて行き、我々三人を牢屋へ入れた。私は、牢屋で横になった。頭から出た血で、私は、血まみれになった。税関の役人は、私を縛っていたロープを切った。月曜日の四時に、税関の人々は、私を釈放した。これらは、その夜ベッドで私が着けていた服である。私が着ていたときには、それは無傷であった。私の服は、カラーをつかまれ、ひきずられて、すりきれてしまった。ときどき、悪寒がするし、熱がある。このような状態が三月近く続いている。ときどき寝て、ときどき目をさます。その夜、一〇時頃、私は寝た。扉が開いても、我々は、ベッドに横になっていたから互いに見えなかった。当初、私は、彼らが中国人か外国人かわからなかった。彼らが私を階下に連れていったときに、彼らが外国人であるとわかった。二人と一匹の犬がいた。私の家は明かるくなかった。二人の紳士は、手に明かりを持っていた。二階にいた外国人二名を指摘することはできない。彼らのうちの一人は、大柄で、あごひげをはやしていた。彼らは、私を下へ引きずりおろしてたたいた。最初、一人の紳士が二回私をな

ぐり、それから彼らは私をたたいて、引きずりおろした。私が倒れたときに、誰もかまなかったが、犬だけはかんだ。それらの紳士が犬をけしかけたのである。犬が私にかみつ、一人の紳士が私の手をつかんで、はしごのてっぺんに引き連れていき、下へ蹴落とした。私は、頭から先に落ちた。誰かが私の手をつかんで扉の外へ引きずり出した。そこで、私は、気を失った。それが外国人であるかどうかは知らなかった。亜慶のところへ来たときに、それが外国人であると知ったのである。階下250に私が落ちたときに、そこには三人の人がいた。亜慶のところに着いたときには約一〇人の人がいた。約一〇人の外国人と二人の日本人警官と一人の外国人警官である。私は、後ろ手にロープで縛られた。私の両手は、立っているときに縛られた。橋の近くの角であった。私は、日本人の警官によって縛られた。犬は、四、五回私をかんだ。亜高が、外国人によって私のいるところへ引き出されたのを私は見た。それから、彼らは亜高の弁髪を縛り上げ、日本人警官が我々を運上所に連行した。私は、その夜現場にいた四人の外国人を今ここで見ている(四人の被告人を指さして)。

A・H・グループによる反対尋問。私は、あなたが私の顔にげんこつを当て、大声を出すと言ったのを見た。あなたは、

私の顔にげんこつを当てただけで、私をなぐりはしなかった。チャールズ・コブデンによる反対尋問。私は、その夜あなたを三回見た。扉の外へ出たときに、私はあなたを見た。ベッドから私を引きずり出したのはあなたではない。あなたは私をたたかなかった。あなたは、私を外へ引っぱり出しただけである。その家で、彼らは賭博をしない。中国の正月に、私は、いくつかのさいころとドミノを持っていた。私は、それらを片付けてしまったので、どこにあるのか覚えていない。それらは、テーブルの上にはない。

C・オクスレイによる反対尋問。その時に前に私はあなたを見たことがない。私は、あへんを吸わない。そのとき明かりがあった。私はあなたが路上にいるのを見た。どのような衣服をあなたが着ていたか私は見なかった。私は、あなたが同じ体格であると気づいていた。あなたは顔に小さい傷跡を持っていた。私以外の二人の中国人が私に言った。ローリングが居た。あなたは、行きつもどりつしていた。あなたは、私に触れなかった。あなたは、クワンタイの家にはいつてから出た。倉庫にはない。

署名 端仁

亜高(A・インを通じて、厳肅に誓約し、尋問をうけた)。

私は、クワンタイの家に住んでいる。私は、五月一七日の夜のことを覚えていたが、そのとき私は寝ていた。私がベランダへ走り出ると、何人かの外国人——九人——を見た。これらの男たちが、グルーム、C・オクスレイ、E・フィッシャーおよびC・コブデン（さらにステイブルズ氏）に該当することを私は確認する。その夜、この五人は現場にいた。

署名 亜高

今夜、審問を終了するには遅くなりすぎたので、当法廷は、翌朝七月一三日の一〇時まで休廷する。被告人は、誓約保証金なしで出廷することを許可された。

一八七二年七月一三日土曜日

法廷は、一〇時に開廷し、被告人は出廷した。

亜高の尋問が継続された。亜高は陳述する。私は、五月七日の夜のことを記憶している。その夜一時に私は就寝したが、一二時近く、私は、表と裏の扉が破壊され、ガラスがわれる音を突然耳にした。その音を聞いたときには、私は、二階の私の隣の部屋でも音がするのを聞いた。そこで、私は起きて、窓から外を見たが、何人かの外国人が隣室へはいるのを見た。それから彼らは私の部屋へはいつてきた。私は、また、何人かの外国人がベランダにいるのを見た。このベランダは私の部屋

(53)

とつづきになっている。私は、部屋からベランダへ走り出たが、外国人たちは私を追ってきた。何人かは私の部屋の窓から、何人かは隣室の窓から出てきた。部屋から五人が出てきて、ベランダには四人が立っていた。彼らは私をベランダでなぐった。私は鼻をなぐられたので、現在提出されている服に血がついた。私は助けを求めて叫んだ。そのとき、突然、外国人の中の一人が私をベランダから階下へ引きずり落とした。落ちたときに、私は、つま先を痛め、足はさびさびした。それから、一人の紳士が私の弁髪をつかんで私をつるし、犬がかみついた。彼らは、扉の外へ私を連れ出し、また犬がかみついた。それから、彼らは、二人の日本の警官に私を差し出した。日本の警官は、二人の男がいるところへ私を連れて行った。この二人は、亜慶と端仁である。日本の警官は、私の弁髪で私を彼らに縛りつけた。それから、何人かの外国人は、日本人警官に、我々を税関へ連行し、牢屋へ入れるように指示した。それで、私は、日曜日に牢屋にいたのである。私は、ステイブルズ氏とフィッシャー氏が運上所の牢屋の扉まで行くのを見た。そこで、ステイブルズ氏は「心配ない。明日釈放してやる」と言った。フィッシャー氏は「靴屋よ、月曜日の午後四時には釈放してやるよ」と言った。

(53)

E・フィッシャーによる反対尋問。その夜、私はあなたがいるのを見た。あなたは、私をぶたなかった。はい。あなたは、家の中、二階のベランダにいた。扉のところへ私を連れていったのは、オクスレイ氏である。牢屋には私と一緒に何人かの日本人がはいっていた。彼らの名前は覚えていない。あなたが彼らに話しかけるのを私は見なかった。あなたは私に話しかけなかった。ベランダに何人かの日本人がいたかどうか、私には見えなかった。確かにあなたはそこにいた。亜慶と端仁は、クワントイの家の扉の反対側にいた。

C・H・グルームによる反対尋問。私は、何かが壊れる音で目を覚ました。私の部屋の窓は破壊されなかった。あなたはベランダにいた。日本の警官はいなかった。ベランダにいる間、私はたたかれなかった。私が縛り上げられたところには、約一人の外国人がいた。私は、彼のあとから、リビングストーン氏がベランダへ走るのを見た。私がベランダにいたときに、あなたは私をなぐった。あなたは私の鼻をなぐった。

C・H・コブデンによる反対尋問。あなたはベランダにいた。あなたは私をなぐらなかった。ベランダには九人の外国人がいた。落ちたときに、私は、階下では外国人を一切見なかった。

C・オクスレイによる反対尋問。私は、あなたが、私の家からベランダへ来るのを見た。あなたは、私をベランダから下へ投げた。あなたは私の服をつかんだ。目に血がはいったので、あなたの服装は見えなかった。ローリングを見た記憶は私にはない。あなたは私に話しかけなかった。私は、あなたの顔を見たり、その顔があなたであると知っていた。私は、同僚の囚人と話をした。亜慶も端仁も、私の様子を説明しなかった。後に、彼らと話したときに、私は、私を落としたのはあなただと言った。亜慶は、彼をひきずりおろした人がどのようなものであったのかは、言わなかった。端仁も言わなかった。私は、亜慶あるいは端仁に、あなたのことについては言わなかった。私は、新聞屋のオクスレイが私をひきずり落としたと言っただけである。グルーム氏が私をなぐったときに、ベランダには四人の紳士がいただけである。その夜は月夜であった。ベランダには月明かりがあった。

ホール氏による再尋問。私は、家のうしろのほうで寝ていた。ベランダにははしごがかかっていた。犬は、はしごの下のほうで私をかんだ。

法廷に対して、ベランダは、地上から一八尺か一九尺あった。私は、はしごを降りたのではなくて、まっさかさまに落ち

たのである。

署名 亜高

枕（厳肅に宣誓してから）は陳述する。私は、八〇番のクワ
ンタイの家に住んでいる。私は、五月一七日の夜のことを覚えて
いる。寝ていたときに、表の扉と裏の扉が壊れる音がしたので、私は起きた。私は一階におりた。私は、一人の紳士が表の
扉から、何人かが裏の扉から二階に上がってくるのを見た。そ
こで、私は、もう一度二階へ駆け上がった。それから、ペラン
ダへ出た。次に、私は、隣の日本人の家の屋根に登った。その
あと、私は、隣家から地上におりた。私は、何人かが隣家の柵
の戸を破壊するのを見た。フィッシャー氏とステイブルズ氏が
私をとめた。これらの兩名の紳士は、「おう。彼はよい人間だ。
彼をとめるな」と言った。彼らは、「あなたは家にはいない
ほうがいい」と言った。（私に話しかけながら）「そこにいた紳
士たちは、まちがってあなたをなぐったかも知れない」と言っ
た。そのとき、ローリングは私と一緒に立っていた。それか
ら、私は、家の中で助けを求める叫びを聞いたので、中へはい
った。それ以上は何も見なかった。

E・フィッシャー氏による反対尋問。私は亜高がローリング
のところへ連れていかれたのは見なかった。私は、倉庫にいた

何人かに尋ねられた。私は、それは私のものと言った。私
は、ステイブルズ氏にそれは塗装屋の家だと言った。私は、塗
装屋にその家を貸していると言った。私は、多くの人間がその
家に住んでいるとは言わなかった。私は、彼らが礼儀正しい人
間だと言ったのである。亜慶は、大阪からやってきた靴屋であ
る。端仁は塗装屋の友人である。

C・H・グルームによる反対尋問。私の知っている家では賭
博は行われなかった。

C・コブデンによる反対尋問。私は、その夜あなたがそこに
居るのは見なかった。

C・オクスレイによる反対尋問。ローリングは、私が彼と一
緒であったときに、彼が立っていた倉庫のうしろから見られる
ことはありえない。私は、亜慶と端仁がクワンタイの家の角で
縛り上げられるのを見た。そのときローリングは私と一緒にあ
った。多くの日本人が見ていた。

法廷に対して。亜慶と端仁は、クワンタイの家の反対側に立
っていた。私が音を聞いて家の中にはいったのはそのときであ
る。亜慶と端仁が縛られていたときに、別の場所に外国人が立
っていた。フィッシャー氏がいるのは見なかった。私は、自分
自身の家にはいったが、それはクワンタイのものである。

署名 枕

竹内謙吾。五月一七日の前前一時頃、私は歩いていたが、助けを呼ぶ声を聞いたので、八〇番の前まで行った。ずっと遠くの方から聞こえてきたから、十字路まで行った。外国人に捕えられた中国人が一人おり、外国人たちは、我々はあなたに彼を引き渡すと言った。それから、他の中国人が屋根の上に走って逃げたから、彼らを探すためにランタンを貸してほしいと言った。私は、外国人たちと一緒に行ったが、その外国人たちは屋根の上の上が行ったのである。私は彼らと一緒に行ったが、中国人は発見しなかった。そのあと、屋根の上で彼らを発見しなかったが、外国人たちは、他所から十字路へ、二人の中国人を連れてきた。そこには、約一〇人ぐらいの外国人がいた。そこには、最初、警察に引き渡された中国人がひとりいた。その時は、三人の外国人がいた。彼らが件の二人の中国人を連行してきたときには、多くの外国人がいた。三人の中国人を引き取ったときに、私は彼らを警察署に連行した。外国人たちは、彼らを十字路に連れてきた。そのあと、私は彼らを外務省に連行したのである。彼らを外務省に送付したあと、私は別のところへ行った。外国人たちは、私にこれらの中国人が賭博していたと教えた。外国人たちは、私に中国人をうまく監督で

きないかと頼んだ。私は、そうしようと言った。私は、何が起こったのか知らない。私は、これらの外国人たちの何人かがその夜現場にいたかどうか確認できない。私は、彼らを特に注意していなかった。

C・H・グループによる反対尋問。私は、賭博の道具については知らない。私は、彼らが賭博をやっていると私に言った人物の名前を知らない。外国人たちは、私に彼らが賭博をしていると言ったので、私は彼らを連行した。私は中国人を縛り上げる手伝いをしたが、それは、事情をよく知らなかったけれども、外国人たちが私にその中国人たちが博打打ちであると言ったからである。私は、逃亡しないように最初の中国人を縛り上げた。二人の外国人が私より前にはしごを上がり、私はランタンを持って彼らのあとに続いた。私が最後に下におりたが、下には多くの外国人がいた。はい。私は、「片目」の戸を破るのを手伝った。扉は、おびただしく蹴られなかった。何人かの悪人がいると私は信じたので手伝った。あなたは、我々にありますがとうと言わなかったか。私は、帽子に手をかざして、よろしい、よろしいと言った。三人の外国人が中国人の髪の毛をつかんで、彼は博打打ちだと言ったのである。私は、この扉が抜け道だと思ったので、杖で扉をあけたのである。

E・フィッシャーによる反対尋問。ペランダには外国人が二人だけいた。九人ではない。雲空であった。月は見えなかった。非常に暗かったし、見晴しはよくなかった。

W・ホールによる再尋問。外国人たちは最初の中国人の髪をつかむ以外には、彼を私が縛り上げる間手伝わなかった。その中国人の顔から血が流れ出ていた。

署名 竹内謙吾

広中弥八郎。私は警察官である。私は、五月一七日のことを覚えていて。私は、浜町を歩いていて。私は、一人の日本人の警察官が同じ通りにいるのを見た。そこで、私は、ランタンを持って、外国人と一緒に件の中国人の家へ行った。一人の日本人警官が賭博道具を持ってきた。外国人たちは、賭博道具を私(59)の事務所に送ってきた。私は、外国人がそうするのを見た。すべて外国人が、中央通りに行ったので、我々も一緒に行った。それから、警察署へ私は戻った。外国人たちが警察官にサイコロを渡したのは中国人の家でのことであった。サイコロはテーブルの上にあった。私は、警察官にサイコロを渡した警察官を知らない。私はその場所で賭博行為を見なかった。私がそこへ行ったときには、中国人は一人もいなくて、日本人の女性が一人いただけである。サイコロが引き渡された時には、そこには

外国人が六、七人いた。午前一時以後のことであった。警察署へ行った三人については私は何も知らない。

署名 広中弥八郎

これで、告発のための陳述を終了する。

飯沼貫(C・オクスレイによる尋問にあたり、真実を語ることを厳肅に誓約した)。私はその夜サーカスに行ったことを記憶している。サーカスは開催されていた。翌晩は行かなかった。催し物がなかったからである。あなたは私の主人である。

その次の夜、あなたは、なすべき仕事がないから就寝すると言った。私はあなたがベッドに行くのを見た。それは八時前であった。あなたは、体調が少し悪いのをこぼしていた。その前の晩、あなたは病気であるのをこぼしていたが、前もって私を劇場へやった。私は、あなたが就寝してから外へ出たことを聞き(60)はしなかった。あなたがその夜遅く帰ってきたときに、私はあなたの声を聞いた。

署名 飯沼 貫

C・H・グループは、その夜そこに居合わせたことを認めたが、中国人を誰一人がなかった。好奇心から彼の主人の召使たちが賭博をしているのではないかと見に行っただけであると彼は主張している。

料

E・フィッシャーは、中国人をなぐったことは否認するが、クワンタイの家の角にいたことは認めている。

C・H・コブデンは判断を法廷に委ねる。

資

C・オクスレイは現場にいたことを全く否認している。

ジョン・J・ステイブルズは正式に宣誓して陳述した。私は、問題となっている夜のことを記憶している。私はその夜オクスレイ氏を見なかった。

判決

本裁判において、チャールズ・ヘンリー・コブデン、エドワード・フィッシャー、アーサー・ヘスキス・グルームおよびチャールズ・オクスレイは、中国人、亜慶、亜高および端仁に対する暴行により告発されている。三つの暴行が、同じ夜、同じ場所で遂行されたと主張されている。ローリングの証言によれば、被告のうちの三人、すなわちコブデン、グルームおよびフィッシャーが駐在所にやってきて、彼らに中国人の賭博場を示唆するように頼んだようである。約一二ぐらい教えたが、明かりがついていたのが一つだけで、三つの暴行が遂行されたと言われるのがその家であったとローリングは主張する。

私は、証拠から、無慈悲で卑劣な暴行が遂行され、三人の中国人が、被告、コブデン、グルームおよびフィッシャーたちが

一部をなす一団によって暴行を受けたことを確信する。私は、三名の被告が共通の不法な意図を持ち、その不法な意図の実行において、この三名の各々が協力し教唆したと信ずる。私は、三名が賭博場を捜し始めた時に中国人に暴行を加えることを意図していたと信ずるので、告発された三つの暴行罪について三名を有罪とするものである。彼らが現在後悔していると私が確信する暴行行為のいくつかについて、無実を証明しようとの希望を表明したことに私は満足する。しかしながら、証拠から私が判断するかぎり、彼らが賭博場へ行つたことについてはどのような正当事由も存在しない。そこでなされた行為は、極端に恥ずべきことであつた。たとえ彼らがそこで博打打ちを発見したとしても（しかもそうとは思われない）、彼らは、秩序維持と公徳心の監視との任務を負わされてはいないのである。さらに、彼らは当該目的のために自警団を編成する権利を持たない。私は、攻撃がくり返されたようではないと信ずるので、それゆえ、裁判の目的が、三名の被告、コブデン、グルームおよびフィッシャーの各々に一〇〇ドルの罰金を課すことで成就されると思われるものである。

被告オクスレイに関しては、私は、彼が一団の中に全くいなかったと確信する。私は、彼に対して積極的に宣誓証言した証

人が故意に真実に反することを話したとは信じない。私は、それがまちがった同一視であると信ずる。

事実認定

それゆえ、私は、チャールズ・オクスレイに対する暴行についての亜慶の告発を却下する。

私は、チャールズ・オクスレイに対する暴行についての亜高の告発を却下する。

私は、チャールズ・オクスレイに対する暴行についての端仁の告発を却下する。

私は、チャールズ・ヘンリー・コブデンが亜慶に対する暴行について三〇ドルの罰金と、上記の亜慶に対して五ドルの訴訟費用と、さらに二ドル五〇セントの法廷費用を支払うべしと判決する。

私は、上記チャールズ・ヘンリー・コブデンが亜高に対する暴行について三〇ドルの罰金と、上記の亜高に対して五ドルの訴訟費用と、さらに二ドル五〇セントの法廷費用を支払うべしと判決する。

私は、上記チャールズ・ヘンリー・コブデンが端仁に対する暴行について四〇ドルの罰金と、上記の端仁に対して五ドルの訴訟費用と、さらに二ドル五〇セントの法廷費用を支払うべし

と判決する。

私は、アーサー・ヘスキス・グルームが亜慶に対する暴行について三〇ドルの罰金と、上記の亜慶に対して五ドルの訴訟費用と、さらに二ドル五〇セントの法廷費用を支払うべしと判決する。

私は、上記のアーサー・ヘスキス・グルームが亜高に対する暴行について三〇ドルの罰金と、上記の亜高に対して五ドルの訴訟費用と、さらに二ドル五〇セントの法廷費用を支払うべしと判決する。

私は、上記のアーサー・ヘスキス・グルームが端仁に対する暴行について四〇ドルの罰金と、上記の端仁に対して五ドルの訴訟費用と、さらに二ドル五〇セントの法廷費用を支払うべしと判決する。

私は、エドワード・フィッシャーが亜慶に対する暴行について三〇ドルの罰金と、上記の亜慶に対して五ドルの訴訟費用と、さらに二ドル五〇セントの法廷費用を支払うべしと判決する。

私は、上記のエドワード・フィッシャーが亜高に対する暴行について三〇ドルの罰金と、上記の亜高に対して五ドルの訴訟費用と、さらに二ドル五〇セントの法廷費用を支払うべしと判

料 決する。

私は、上記のエドワード・フィッシャーが端仁に対する暴行について四〇ドルの罰金と、上記の端仁に対して五ドルの訴訟費用と、さらに二ドル五〇セントの法廷費用を支払うべしと判決する。

あわせて、私は、訴訟費用として亜慶に支払われる金員から五ドルが控除され、訴訟費用としてチャールズ・オクスレイに支払われるべしと命ずる。

また、訴訟費用として亜高に支払われる金員から五ドルが控除され、訴訟費用としてチャールズ・オクスレイに支払われるべしと命ずる。

さらに、訴訟費用として端仁に支払われる金員から五ドルが控除され、訴訟費用としてチャールズ・オクスレイに支払われるべしと命ずる。

一八七二年七月一三日

署名 H・S・ウィルキンソン

女王陛下の領事代理兼判事

兵庫大阪英国領事館の印

(後記) 本稿は、一九八九年度大阪経済法科大学研究補

助金助成による研究成果の一部である。